

---

U S O よね・・・

Seabolt

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

USOよね・・・

### 【Zマーク】

Z2818Z

### 【作者名】

Seabolt

### 【あらすじ】

突然、お見合いをしろといわれたのぞみ・・・そのお見合いで既  
に結婚が前提・・・しかも、相手は・・・

「は」

溜息をしかでなかつた。なぜ私が？・・・しかも・・・この年で・・・まだ高校生なのに・・・・・・

「え？～！…お見合二～？・・・」ハニカム。

家に帰つたのぞみはは思わず大声を上げてしまった。のぞみにどうして・・・この日、天国と地獄がいつぺんにやつて来た。それは2学期が始まつてすぐのことだつた。

まず最初にやつてきたのは天国だつた。実はこの日のぞみは中学から<sup>しまだゆつじ</sup>の同級生の島田雄一から学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすつとした顔立ちをした島田雄一が待つていた。彼は甲子園へは行けなかつたが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあつた。

「畠田岬、どうしたの？」こんなとこ呼んで。

そう話しているのぞみ自身、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だった。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田……おれ……ずっとお前のことが好きだった。そして、今も・・・」

田の前で起つてこむ夢にまで見ていた光景にうつとうとしているのぞみだった。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけではなく、答えはむしろYESと即答したいところだったがここはぐつと我慢した、しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らった感じになつた。それは、のぞみが近づいて手をとろうとした時だった。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！――」

「えつ？」

「明日、――でな――」

のぞみが驚いてこむ間に島田は、わざととのぞみから離れ去つて行つた。なんのよーーーと思いつつも眞分は最高の状態だった。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かった。それは、家に帰つたのぞみを父が呼び止めたことから始つた。今思えば、大体、ごく普通のサラリーマンである父は、こんな時間に家にいること自体珍しいと言つかおかしいことであった。

「のぞみ・・・ちょっとといいか?」

珍しいなあ～のぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・これってどういうこと?ひょっとして、私に就職しろということ?これでもれつきとした受験生ののぞみ・・しかも・・私立だけど進学校である城山高校の・・それともリストラにあって学費がきつくなつたの?そう思つているとお父さんが話しかけてきた。

「まあ・・・座りなさい・・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・二人の雰囲気が・・・やはりおかしい・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん? そう思つていたのぞみの予想だにしなかつた言葉が父の口から飛び出してきた。

「のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えつ～!お見合い!??・・・どうこいつ」と?」

私は思わず大声を上げてしまつた。

「だから、来週の日曜日に見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母は「いやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ  
・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ビ・ビビビ<sup>えつ?い・</sup>  
う」と?セ・・セツム・・これはセツと「冗談よ・・セツ・・・絶対  
セツム・・

「ジコー・・・・・・冗談でしょ?お父さんたら~ねえ~またまた・  
セツム・・

父の表情が少しあわび、こつものおちやらけた雰囲気を出してきた  
た・・・やつぱつセツム・・

「アハ・・・冗談・・・

少しふざけたよつておもて元気だった時を母が制した。

「あなた!~」

えつ?お母さんまで・・・びづこづことよ。再び父の表情が険しくなった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、お母さんまで、お互いの顔を見合せて頷こづかって、しかも・・・真顔でのぞみのぞみを向いた。

「本当だ・・・

嘘―――のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言つてゐるのよ～おとうさん・・・うそでしょ？しかし、本當だとこの言葉が何度も繰り返し頭の中を駆け巡る・・・どうこうこと？のぞみはしづらへ呆然とした。

「う・・そ・・よ・・ね」

「うれじやないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うれじよ・・わたし・・受験生よ」

「のぞみ～頼むから・・・」

そう言つた父の方をみると土下座してゐるを見て驚いた。・・ちよつと何してんのよ・・・やつ黙つていると母まで土下座をはじめた

「やめてよ～おとうさん・・お母さん・・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめな這一入、

そもそも原因は、のぞみの父にあつた。彼の学生時代 父が通つていた大学の親友である藤堂とうじょうとある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだつた。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。しかし、

ある日のこと、仕事上で藤堂と会つことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えていいだろ?」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに……と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは瞼み付いた。

「ちょっと待つて……」の話ついで……すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ……！」

「いやよーーー、なぜーーーいきなり結婚なのーー?」

「本当にすまない。」

とつとつ父は土下座をしたまま、頭を床に当たし、私のほうへ顔をあげることすらしなくなつた。ん?と母を見るとこやかな顔をしてのぞみを見てくる。

「こいじやなーー・のぞみ・・行き先決まつて。」

「ちょっとお母さん……な・・・なんて」と……

「彼氏いるの?」

「な・・・母さん……。」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ・・・。」

「ちよ・・・ちよつと・・・

「一度よかつたじやない・・・」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ・・・たのむ・・・」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなつた頭を床に擦り付けている姿が哀れでしうがなくなつてきた。おとうさんも乗り気じゃないのに・・・ここまでするなんて・・・のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかつたわ・・・

そして、ガクツと肩をおとし、うつむき床の縫合田を私はじつと見ていた。

そんなり・・・酒の席のことを見

はあ・・・なんて不幸な少女なの私は・・・やう思つてゐると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ・・・これ・・・」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した田の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくつとする父

しばり黙つてゐる・・・

「これは？」

もつ一度聞くと父は目を閉じふつとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語つた。

しかしその声は徐々に声が小さくなる父親・・・そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ・・・相手の名前は、藤堂光・・・」

藤堂光その名前はのぞみにとつて、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった。・・・しかし、その写真を見て愕然とした・・・おかげで頭のデブ・・・センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして・・それには、この意味のない無精ひげ・・・一瞬期待していたのぞみにとつては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとつむいて目をあわそとせず小さな声でぼそつと

「28歳」

のぞみは目を見張つて、もう一度の写真を見た。2・・・28歳つて私より10歳も年上つてどう見てもこの人28に見えない・・・しばらく、その写真をじつと見ていたというか固まつていたのぞみ・・やがて・・手が震えだした。

「のぞみ？」

かすかに聞こえる母の声、ビービィーと振るえが止まらない……

「うわ・・・よ・・・ね?」

私はお見合い写真がぽとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るといったと頭を上げ下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

かなりの沈黙の後、

「あへ――――」

のぞみの心から叫び声に驚き両親を思わず抱き合つていた。

ビービー

本当に娘の幸せを考えてるの？

はあー・・・・とため息をついて席を立つた。

「どこの行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合つたままびくつとなつていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！？そう思つているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんだ。

藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車で登校。そんな彼にのぞみも憧れていた一人だった・・・でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えり（おとわえり）がいる。しかもその彼女とは幼馴染ときていて、どこにも入る隙もないし、うわさでは、ちょっとかいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとつては雲の上の存在の彼だけた いくら同じ名前でも・・・と思い再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベッドの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにいくつも平凡な顔立ち空手をしているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいしなんて不幸なんだろう・・・やつぱりあるおかっぱテープとは、違いすぎる・・・いかんなんとかしないと・・・うん・・・何か忘れているような・・・・・・・そうだ・・・今日告白されたんだつてつけ・・・・今度は島田雄一の顔が浮かんだ・・明日返事しないと・・ん?・・・この見合い壊すの手伝ってくれるかな?・あ〜どうしよう・・・眠れない・・・

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

藤堂は、さつき父親から渡されたもう一度お見合いの写真をみた。そして、思わず「ミニ箱に投げ捨てベットに倒れこんだ。親父の奴全く一体何を考えてるんだ？・・・これが藤堂が最初に思ったことだった・・

実は同じじとが藤堂家でも起きていた。

それはちゅうと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤堂は父の言葉に我が耳を疑つた。

「来週の日曜日に婚約者と会つ」とになつた。

「ちゅうと待て！…婚約者つて…どうこう」だ…！

ダーン！…と机を思いつきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・・いきなり結婚という訳にいかんから、といあえずお見合い形式で顔をあわせる」とにな

「約束つて、俺何も聞いてないぞ…！」

「やかまし…！」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光！…もう決まったことだ…それとも、わしの顔を潰す気か！

！」

立ちはぐくじぐつと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいだいこうな  
ると親父は誰の言つことも聞かなくなるといつひとを息子である藤  
堂自身が一番知つていた。

「ナビ・・・

藤堂の言葉を無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良じ尊きかんのだが」

「なんのこじだ。」

「「」の前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車でぶつかってきた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は一〇日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出すなどまで言つていていたのだった。しかし、藤堂に逆らつたら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま尊に負けて学校を去った。そのことをつらんでいるのか親父は？そう思つ藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違うだろ？！－！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合いで写真を藤堂の前に出した。

「？」

田の前に置かれた見合いで写真を見て、いやな予感がした藤堂……手にした見合いで写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のやみさん28歳」

その言葉にちょっと待て今なんていつた？ 確か28歳って言つたよな？ そう思つて父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだつたら？」

ぐっと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身の回りの世話をしてくれた家政婦だつた。しかし、そんなことは藤堂にとって既に過去のことだつた。何をいまさら写真を開いて見た。その瞬間、田はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬直した。そして、わが田を疑つた。

「…………（声が出ない）」

な・・なんだ？ この写真？ 親父本気か？ どう見ても40過ぎのおばちゃんじゃねえか？ しかも、下手なというか？ なんていう化粧の仕方だ？ そう思つたらただ震えて・・父親を睨んだ。

「なんだその田は・・」

そこには、どう見ても少し太めのおばさんの姿が映っていた。

—  
•  
•  
•  
•  
•

「何か文句でもあるのか?」

—

藤堂は無言で、部屋を後にした。

「今度の田曜田は絶対にあわせるからな……。」

ベットに横になつてゐる藤堂は、岡田のぞみ・・か・・そう思いながら・・・悩んでいた。ふと、幼馴染の音羽エリの顔がよぎつた。学校では彼女として周りに公認されてゐるが実のところがどうも合はないと藤堂自身は思つていた。あの性格からしてエリには頼めない・・・といふか親父の奴すでに手を回してゐかもしれない・・・ふと、音羽の姉、音羽静の顔が浮かんだ。しづ姉えには迷惑はかけらない・・・どうしたらいいんだ?

「うつして藤堂も眠れぬ夜をすごした。

「のぞみは最悪の田覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになつた瞬間にけたましく鳴り響く田覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさの非ではないくらいにつらいものとなつた。何とか起き上がりたのぞみだが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだつた。ただ今日、島田に会つこと、それがのぞみの唯一の希望の光であつた。しかし、彼女の悲劇はこれだけでなかつた。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていかつた。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫つていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然と走っていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかつた。そつその車の主は藤堂だつた。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで田を覚ました。

「どうした?」

運転手がクラクションを鳴らすが田の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあつた。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワガとか？」

田の前をふらふら歩く少女を見た藤堂  
「どうこうつもりだ？」 そう思いつつも田の前の様子を見ると、  
クラクションに向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは  
埒が明かないやつ思つた藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えつ？でも」

「いいから止めや」

車から降りた藤堂はのぞみに向かつて歩いて行き腕をとつた。

「おこ」

腕を取られたのぞみはえつ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に  
突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になつていった。もう・・・。  
なんなのよ・・・やつ思つてこるとじろく再び藤堂が声をかけた。

「おこーーー！」

「なんなのよーーー！ 一体ーーー！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があつた。しまつ  
た！何故？藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まつてしまつた。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、  
しかもその真っ赤でかすかに涙を浮かべいる田が自分をしたから見  
つめる姿に言葉を失つた。

「あつ・・・」

しばらく見つめつゝ一人・・・その様子を見ていたギャラリーからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見ろ。」

のぞみが指差された方を見ると、そこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。  
やばーやつちやつた　震える指で車をさしたのぞみ  
は、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして・・・」

「せう・・・」

少し険しい顔をした藤堂が「クリとつなぎいた。

「私が邪魔を・・・」

「せう・・・校門から・・・」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「いわんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まづこ・・・怒鳴りつけられたる・・ビツコウつ

そつ思このぞみ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになつて怒鳴り散らしていたからだつた。しかし、このときは何かが違つた。車が通れるところを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「「あんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのでみ

「わかつたから、行け。」

「あつがとうござります。」

助かつた・・・やう思いのぞみはそそくせと逃げて行つた。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さつきまで握つていた手をみた。  
なぜ？俺は怒らなかつたんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を田で追つた。そんな時だつた。ふと小さい頃を思い出した。

堂の額にキスをする少女も姿・・・あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだつた。気が付くと自分の額に手を当てていた。  
いかん・・・俺は何を・・・やはり昨日のことで眠れなかつたせいか？・・・藤堂は頭を振つた。そして、運転手に

「いいから歩くから・・・」

そういう残し、教室に向かつた。

さくあく・・・2

あー！さいあくぐー！！！朝からなんてついてないのぞみは頭を抱え自分の席にいた。やつてしまつた・・・・・手を引かれ一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限つてのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかつた。ひょつとして・・・学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだー！

！・・その瞬間、さつきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したくもない顔に変化した、そうおかっぱ頭をした意味のない無精ひげを生やしたデブのおつさんの顔が・・・・思わず頭を左右に振り、そして、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそつと近づく二人の姿があつた。親友の岩崎裕子と大山美由紀だつた。

「のぞみへ見たわよ」

ପ୍ରକାଶକ ମନ୍ତ୍ରୀ

のぞみは、ふと顔を上げ・・・・はあーとため息をつきつむいた。  
その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元気ないね。」

いや。別に。

目の前に立つ一人を見たのぞみ・・・再びため息を付いた。それを見ていた大山はそつと後ろに回った。

「本當？」

そう言つて、のぞみの首を絞めた。

「ぐあ～！！」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞつた、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね～」

「は・・はなして・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふうとため息を付いて二人を見た。

「あんなことつて？」

のぞみの言葉に目が点になる一人・・・

「ちょっとー！大丈夫、のぞみー！」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持つて前後に激しくゆすった。その搖れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持つてゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよー！ー！」

「だから、今朝のことよ・・・」

「今朝つて？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・あれね・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるつて、もう学校中大騒ぎよー！」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさつきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あー！ーと叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する一人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょうーーー！」ね

そう言つて大山がのぞみを手を引いた時、

「ほつといてよ、それどころじゃないのよ。あーーーもう終わりよーーー！」

そう言つてのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入つて思わずのぞみから離れた。

机に伏せていたのぞみは、フト暗くなつたのに気付いた。どうしたんだろう、ひょつとして眠つてしまつたの？ そう思つて見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立つていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・音羽とその愉快な仲間達だ・・・ただそう思つていた。ふと見ると若崎と

大山の姿がなかつた。どこ行つたのとあたりをキヨロキヨロして、  
ると教室の片隅に一人が逃げていたを見つけた。あの一人……。  
そう思つていたら、田の前で腕を組んで立つてゐる音羽がのぞみを  
睨み声をかけてきた。

「ちよつとーーあなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、  
のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひょつとして?」

「あなた以外に誰がいるの?」

えつ? 何で私なの? そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告つて?」

どうこうひとのぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そつ・・あなた・・・直観なさそつね

「なにを?」

「本當」・・・じいばつくれてーーー」

「えつ?」

「藤堂さんの車が通るのを邪魔したでしょ」「……」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座つたまま少しのけぞつた。その時、のぞみを再び睡魔が襲つてきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うあああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふつと吐いた・・

「まあ～今日は見逃したげるわ・・ふん」

そつ言い残して音羽たちは教室を去つて行つた。

しばらくして、近寄つてきた岩崎と大山・・・

「なに・・・あれ・・・」

「なに・・・って、あんた達、」

のぞみ急にキヨロリ、キヨロリと一人を見て

「えつ・・・・じつしたの？急に元気出して・・・」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょ」「お仕置きよ



頬杖を突いて席に座っている藤堂は、さっき手を引っ張った時、振り返ってきた彼女の顔が思い浮かんだ。そんな時、俺どうしたんだ？何故あいつの顔が気になるんだ？そう思つていると横から聞きた声が耳に飛び込んできた。

「よつ。藤堂」

そう言つてポンと肩を叩いた小宮真、そして、井上豊は笑いながら鼻しきてきた。

「どうしたんだ。藤堂。今朝のあれ。」

藤堂は頬杖を着いたまま一人から田をそらしたため息混じりに声を漏らした。

「あ～あれか・・・」

元気ののない藤道に一人は顔を見合せた。そして、井上が藤堂に肩を組んで

「いつもならもつと怒つてたろ？」「

「やうか？」

力なく答える藤堂・・・

「そういえば・・・元気ないな・・・どうした？」

小富が藤堂の顔を見て、聞いてきた。

「いや・・なんでもない。」

味気ない返事に井上と小富は顔を見合させ、首をかしげた。そこへ音羽が教室に入ってきた。

「光<sup>ひかる</sup>」

「おっ・・彼女のお出ましだ・・・」

藤堂は、ちらりと音羽に目をやり、ふうっとため息を付いた。

「どうしたの。？」

音羽は、不思議そうに見て、藤堂の前に座る。

「なんでもない・・・・」

そういうと藤堂は音羽から目をそらした。

小富と井上の方を見た音羽は、藤堂を指差し

「？」

一人は、両手を挙げ、わからないそぶりを見せた。

「まつ・・いつか・・今朝の見たわよ」

「何を？」

「あれか？」

まともに返事をしない藤堂元

「どうしたの。 本当」

「なんでもない。」

「もう？・・・といひで、今週の日曜日あこへる。」

音羽が聞くと藤堂は、わざにため息をついて

「その日は、用事がある。」

「あつもう？・・・じやあ今度ね・・・」

そつぱつて音羽は立ち上がり小廊と井上元

「どうしたの」

「朝からあのまま・・・俺達にもわからん。」

「もう」

音羽は教室を後にした。

昼休み、藤堂は、礼拝堂の裏にあるベンチに腰掛けっていた。この場所は藤堂のお気に入りの場所で一人でいることが多かつた。藤堂は悩んでいた・・・親父の奴・・・一体何を考えてるんだ?なぜ、今なんだ?そこへのぞみが一人で歩いて来るのが目に入った。あの女、今朝の・・・と気付いた藤堂はその様子を見ていた。

のぞみは昼休みに入つてすぐに、昨日島田と会つた場所へ向かつた。昼休みよね。確かにそう思いしばらく携帯の時計を見ながら待つていた。遅い・・・ひょっとして昨日のはうそなの?それとも今朝のことであつた?と田の前に島田の姿を確認した。

「岡田さん・・・」

島田が声をかけて近づいてくる様子を見て少しもじもじするのぞみ來てくれたってことは、のぞみの前に来た島田を見て少しうつむいた。

「あの・・・」

のぞみが決心して、話そとした時だつた。島田の様子がおかしいのに気付いた。それは目を大きく見開いて、のぞみの後ろを見ていた。

あれ~どうしたんだろう?

「岡田さん……」

「はこ・・・」

そう答えたのぞみの肩に誰かの腕がずしりと乗っかった。その衝撃に驚いて振り向くとそこには藤堂が立っていた。

「と・・・藤堂さん?」

その声にチラシとのぞみを見た藤堂は視線をすぐに島田の方へ向けた。何故藤堂さんがここにいるの?のぞみがそう思っていると藤堂が島田に話しかけた。

「島田・・・」の娘と話があるんだけど、せすじてくれないか?」

「え? けど・・・」

しそひじく固まる島田・・・島田痴逃げないと祈るのぞみを無視して、島田に睨む藤堂

「休み終るんだけど・・・」

「岡田・・・悪いわ。」

ややくわと逃げよひとする島田

「あ・・・ひみつ」と

のぞみが止めよひとするが島田は逃げて行つた。

「じやあ・・・」

「島田君・・・」

のぞみが言つた言葉にはむなしさしか帰つてこなかつた。あ・・・のぞみの心の叫びは届かぬまま、島田の姿は校舎の影に消えていつた。どうしうつ・・・そつ思つて振り向くとかひこま、少しにやけた表情の藤堂が立つていた。

「何で」とあるの?..

のぞみは思わず言つてしまつた。その言葉を聞いてしばらぐのぞみの顔を見た藤堂、「いつだつたら・・・こけるかもそつ思つて。のぞみの顔を指差した。

「今朝の事といい・・・いい度胸してゐなあ~」

「えつ・・・」

「咲前は?..

「えつ?..」

「だから・・・咲前は?..」

「岡田のぞみ・・・」

仕方なしに答へるのぞみ・・・岡田のぞみと聞いて、藤堂は、お見合ご同真を思い出した。そして、のぞみをもう一度よく見よぶと気づいた。

近づいてくる藤堂・・・な・・・何故?近づいてくるの?やつ思い  
つつ少しづつ後ろにやがるのぞみ・・・

「な・・・なんのみーーー」

「ふ～ん・・・岡田のぞみ・・・か」

さう近づいてくる藤堂・・・やがて、のぞみの背中が壁に碰到した。えつ?ひ・・下がれない・・・どうしようつ・・・のぞみがそう思っていると藤堂の右手が伸びてきた。思わず手をつぶるのぞみ・・・その手は、のぞみの顔をかすめバンと壁についた、

そして

「気に入った。・・・」

「えつ?」

その言葉に驚き田を開けると藤堂の顔が田の前にあった。なんのよーーー今朝の仕返し?やつ思っているのぞみに藤堂はやさしく語りかけた。

「じょひへ、俺の彼女にならないか

い・・今・・・なんて言ったの  
・・・のぞみの思考は3秒ほど止まった。ふと藤堂を見るといち  
ちかい・・・それもそのはず、彼の顔が目の間じかにあつたからだ  
つた。そして、藤堂からの驚きの一言に思わず聞き返した。

「いま・・なんて?」

小首をかしげているのぞみに対し藤堂は、冷静に答えた。

「だから、彼女にならないか?」

「誰の?」

「俺の」

「私が?」

そう聞き返すと藤堂は軽く頷いた。のぞみは混乱した、何言つてる  
のこの人、音羽さんて彼女がいるくせに・・・一体何考えるのよ・・  
・と言つよつ、私の・・・と島田とのことを邪魔をされたこと  
を思い出した。そして、ふう~と息を吸つて

「何言つてゐるのよ。」

藤堂はにやりと不適な笑みを浮かべた

「彼氏もないだろ?」

あ～頭ごくる・・・のぞみは、藤堂を睨み返した。

「あんたには、関係ないでしょー。」

藤堂はフンフンと頷きながら、のぞみの顔を指差した。

「まあ・・・関係ないナビ・・・でも、こんなにこいつの条件はないぞ。」

「いい条件って・・・確かに条件はいいけど・・・音羽ちゃんはビリするのよ・・・のぞみは、その指を持つてそれを振りほどいた

「それに、立派な彼女がいるじやない。」

「あ～あこつか・・・あこつじやだめなんだ・・・」

「なぜ？」

「あ・・今なんて？・・藤堂さん・・あなた・・彼女がいるのにたださえ・・・ややこしいの！」

・・・しかもあの音羽さんなのに・・・彼女が今の状況知つたらどうなるのよ・・・本当に・・・

藤堂としては、いい加減に折れろよ・・・ほんと・・・・・・・面倒な奴だな・・・エリジヤダメなんだよ・・今回のことば・・・だんだんと苛々してきた。

「あこつじやあ、駄目なんだ。」

「だから。なぜ？」

「俺がいやなんだ！……」

藤堂の言葉にしばらく、固まる一人、なんのこいつ？自分の彼女が嫌なんて？のぞみは呆れた。少しきつく息を吸った。

「嫌よ！……」

「嫌とはなんだ嫌とは…」

こいつ一体……俺のどこの嫌なんだ？だんだんと声のトーンが上がる藤堂

「嫌なものは、いやよ。」

「やうか……どうしても嫌か

「ええ・・

のぞみがそう言つた次の瞬間、藤堂の左手がのぞみの顎をやつと持ち上げ、のぞみの唇に藤堂の唇が重なった。

「……」

のぞみは田を見開いて硬直した。

田の前には藤堂の顔が・・・

そして、唇には感触が・・・

と・・・藤堂さんと・・・

キ・・・キスしてゐるの?わたし?

頭の中は、真っ白だった・・・

やがて唇がそっと離れ、藤堂がのぞみをじっと見つめる

のぞみは硬直し、ただ藤堂の目を見ていた。

キ・・・キスされた・・・藤堂さんが見ている・・・

顔が熱い・・・どうしよう・・・

そう思つてみると藤堂が話しかけてきた。

「これで・・・いいか?」

その言葉でわれに返つたのぞみは、唇を両手で覆つた。

「これで・・・付き合つてくれるか?」

話が言い終わる前にのぞみの右手が藤堂に炸裂した。

パチーン！――！

「えつ？」

藤堂は、叩かれた頬を押さえのぞみを見るとその皿には涙が・・・

「嫌よ――！」

そつ言つて、のぞみは、走り去つていった。

「おい・・待て・・・」

なんなのよ・・・

もう最低・・・

のぞみはその場を去つて行つた。

## 長い夜・・・

のぞみの背中を見送る藤堂、彼女の姿が後者の角に隠れるまで見送っていた。そして、見えなくなると叩かれた頬がジーンとしてきた。その叩かれた頬に手を当て、呆然と立つ藤堂 ふと幼い頃に注意され叩かれた時の記憶が甦ってきた。その時も理由は覚えてないが彼女の妹を泣かせた時だった。藤堂を叩いた彼女も涙に目を浮かべ

「女の子を泣かせちゃダメでしょーー！」

そう叫んでいた。そのことを思い出した藤堂・・・しばりくして、とぼとぼと歩き溜息をついた。俺は一体何をやっているんだ？ただなんとなく胸が痛い・・・そのまま学校を後にした。

教室に戻って来て、すぐさま、鞄をもって教室を出ようとすると、みに驚いた大山と崎

「どうしたの？ のぞみ」

「帰る。」

「どうしたのよ。のぞみーー。」

「帰るのーー。」

そう言って教室を出ようとするのぞみを大山が肩を引っ張った。

「あ・・」

振り返ったのぞみの顔を見て言葉を失つた、大山と吉崎・・・のぞみの目には涙が・・・

「じゃ・・」

ただ呆然とのぞみを見送つた一人だった。

放課後、のぞみのクラスは騒然となつた。それは、また、音羽がやつてきたからだつた。藤堂が帰つてことを知つた音羽に間が悪いことに井上がボソッと適当に言つたことが原因だつた。

「藤堂さんどうしたの?」

「帰つた」

「なぜ?」

「今朝のこととで・・・なんかあつたみたい。」

その言葉を聞いた音羽、あの娘、警告を無視して・・・キッと目が鋭くなつた。そして、いつもの仲間を連れて、のぞみの部屋に向かつた。

「あの娘どこ?」

突如、現れた音羽に教室はざわついた。そして、クラスの一団が音羽の行動に引いた。

「あの娘は？」

そう言って、逃げ惑うのぞみのクラスメートの一人を捕まえた。

「あの娘、どこ行つたの？」

「えつ？」

音羽は拍子抜けした。なに？！帰つたつて？どういうこと？

「本当に？」

「はい・・」

「ま・・・い・い・わ・・・」

そういう残し音羽は帰つて行つた。

それから、しばらくしてのことだった。島田がひょこつりと現れたのは、そして、大山から帰つたことを聞いて、肩を落とし帰つて行つた。

家に帰ったのぞみ、一人ベットの上で膝を抱いて泣いていた・・・。もう・・・最悪・・・なんでこんなことに?島田君を巻き込もうとしたから?今朝のことを思い出した・・・このままじゃ・・・学校も追い出され、無理矢理あいつと結婚するの?ふとあのお見合い写真が頭に浮かんだ・・・あ~あ~嫌だ!!!一人抱えた膝の上に顔をこすり付けていた。どうしよう・・・嫌だ・・・こんなの嫌だ・・・そう思った瞬間、学校での藤堂光とのことを思い出した。

「俺の彼女にならないか?」

その言葉を思い出した瞬間、藤堂のドアップ・・・そして、キスを思い出した・・・思わず唇を触ったのぞみ・・・キス・・・。したんだ私・・・あの藤堂さんと・・・しかも・・・ファーストキス・・・唇にはあのときの感触が甦ってきた・・・一瞬で顔が暑くなり、心臓の鼓動が激しく高鳴った。そんな時だった携帯が鳴り出したのは・・・はっと我に帰ったのぞみは、携帯をとり表示を見ると大山からだった。

「もしもし〜」

「のぞみ〜!!大丈夫?」

「うん。」

「どうしたのよ。」

「なんでもないってば〜」

「そう?本当に大丈夫?」

「うふ。」

そう言つてゐるのをみだつたが、目から涙が出ていた。

「ほら・・泣いてるでしょう・・」

「大丈夫だつてば・・・」

「わう・・・じゃあ・・・のぞみが帰つた後の話なんだけど・・・」

「うふ。」

「音羽さんがあたのよ・・」

「うふ」

「でも、のぞみいないから~すぐ帰つたんだけじね・・・」

「うふ・・・」

「それと・・・」

「・・・」

「聞いてる?」

「うふ・・聞いてるよ・・・」

「島田君、来たのよ。のぞみを探しに・・・」

「えつ？」

「だから……島田君が来たの……ひょっとして、のぞみ、付き合つてるの?」

「付き合つてないわよ……」

「あ……そう……じゃあ……早く元気になつてよ」

「うん……ありがとう……」

「じゃあ……」

切れた携帯を見たのぞみ……そうだ……島田君を巻き込んだ  
らいけないんだ。明日、言わないと付き合えないって……そこ  
には、一人膝を抱えたのぞみの姿があった。

藤堂も一人自分の部屋でじつとしていた。そして、思わずキスをしてしまつたことを思い出した。何故あんなことを……そう思つていても、携帯がなつた。音羽からだつた。しばらく放置していたのだが鳴り止まない……仕方なくすることにした。

「もしもし……」

「あ……光?聞いてよ……」

音羽の甲高い声が藤堂の頭に響いてきた。

「『めん・・・切る・・・』

そつとひとした瞬間、音羽の話に切ることが出来なくなつた。

「あの娘のことなんだけど・・・聞こへる?..」

あの娘その言葉・・・・岡田の『じだ・・・・』と思ひついで思わずぐつと手に力が入つていた。

「ああ・・・」

「あの娘も学校辞めるの時間の問題よ。」

「えつ?」

「だつて~毎休み終つたら帰つたんだつて

「そうか・・・じゃあ・・・」

「もう一つあるんだけど・・・・・」

「まだあるのか?」

「実は・・・・」

「えつ?」

その言葉に藤堂は我が耳を疑つた・・・・

「実は・・・お姉ちゃんの婚約が決まつたの・・・・

「あ・・・そう・・・」

「ちょっと聞いてる?」

思わず携帯を下ろし、音にならないため息をついた。しづ姉しづねえが婚約  
？・・・しづ姉・・・・藤堂の幼馴染でしかも片思いの相手だった。  
しかし、彼女は妹のエリ想いでもあり、彼女自身にとって、藤堂は  
弟みたいな存在だった。それをわかっていた藤堂・・・そして、藤  
堂が中学くらいになつた時、彼女は従兄の隆と付き合い始めていた。  
だから、藤堂は気持ちを伝えることすら出来なかつた。現実を突き  
つけられた藤堂・・・婚約・・・か・・・その時、再びのぞみの顔  
が浮かんだ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2818z/>

---

USOよね・・・

2011年12月17日21時53分発行